

## 保育の人材確保を阻むもの ——実習後のアンケート調査からみえてきたこと——

Obstacles to securing human resources for childcare:  
What we have seen from the questionnaire survey after  
the training

下木 猛史

Takeshi Shimoki

### はじめに（保育の人材を阻むもの）

子ども子育て支援新制度の下、待機児童の解消のために新園の開設等あらゆる対応がとられている中、保育士不足が今なお喫緊の課題となっている。新園開設の条件の緩和や保育士の待遇面の見直し等の様々な改善が進められている一方で、子どもたちにかかわる保育の質という点においては、おどろきにされている感は否めない。全国で相次ぐ保育現場での不適切な保育<sup>注1)</sup>の報道や、不適切な保育へとつながりかねないのではないかと危惧するような現場の実態を卒業生から耳にするにつれ、保育現場を経験した者として、また保育者養成にかかわる者として胸がしめつけられることも度々である。

不適切な保育が相次ぐ状況に、厚生労働省は2020年、令和2年度子ども子育て支援推進調査研究事業の一環として「不適切な保育に関する対応について」の初めての全国実態調査を行った<sup>1)</sup>。それによると、全国96の自治体で令和元年度に345件の不適切な保育が確認され、自治体のおよそ8割が不適切な保育を防止するためのガイドラインを作成していないということがわかった。厚生労働省は、この調査報告書の中で、不適切な保育の未然防止や発生時の対応にあたり、行政や保育関係者の役割や連携のあり方を手引きとして示し、この手引きを元にしながら地域の実情に合わせた対応を検討しながら質の高い保育の提供を目指す必要があるとし、保育の質についての検討がようやくなされ始めた。

筆者は、不適切な保育が相次ぎ発生し社会から注目され始めた2018年から、保育所で起こった事案や筆者が児童福祉施設に勤務していた経験談を授業で取り上げ、学生とともに不適切な保育に至った背景や要因について考える機会を作っている。それは、実習中に不適切な保育場面に遭遇してしまうことによる保育士という職業への不安を軽減していくとともに、不適切な保育が誰にでも起こ

りえるという現実を受け入れ、その対処方法を学んだ上で、保育現場へと進路選択をしてほしいという狙いがある。座学と違い実習は学生にとって保育者像を実践的に体感する機会であり、保育現場へと進路選択をしていく重要な機会である。実習が単なる資格取得のための通過点ではなく、学生にとって保育現場を志すことが実感できる体験となりえるかどうか、常日頃から心をくだいて実習教育にあたっていかなければならないと考えている。

学生の進路選択にとって実習がどう影響を及ぼしているのかについて、大野 (2018)<sup>2)</sup> は、実習中に学生がリアリティ・ショック<sup>注2)</sup>を経験しているのかについて検討し、そのことが学生の進路にどう影響を与えているのかという調査の中で、実習に対する学生が持つイメージと違うことが生じるとリアリティ・ショックを感じることに、また、初めての実習でリアリティ・ショックを感じる学生の割合がその後の実習に比べ多いこと、そして、最初の保育実習において保育者が実習生をどう受け入れてくれるかがその後の進路の鍵となることを指摘している。また、2019年に全国保育士養成協議会が実施した調査研究「指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究」<sup>3)</sup>では、保育士養成校に在籍する学生の中で、就職の決定先や希望先が保育職ではなく一般職に就くことを決めた学生312名<sup>注3)</sup>が一般職に就くことを決めた理由(複数回答)をみると、保育職に比べ「一般職の方が給与や福利厚生が充実している」が31.1%、「休暇の保障や労働時間が適切であるから」が24.7%で、現在の保育業界の待遇面を考えればやむなしといった回答が3割近くを占めている。その一方で、実際に実習を経験してから一般職へと舵をきったという理由もあり、その理由として「実習を経験し保育をすることに自信をもつことができなかったから」が40.4%、「授業を通して保育は想像していた仕事とは違ったから」が22.4%、「実習で保育者同士の人間関係や園の雰囲気が良くなかったから」が16.7%、「実習で保育者の指導や対応が良くなかったから」が10.6%、「実習で保育者の子どもへのかかわりに不信感を覚えたから」が9.3%という結果となっている。

大野 (2018) や全国保育士養成協議会 (2019) の調査から、実習中に学生が不適切な保育場面に遭遇してしまうことや、保育者の実習指導のあり方によって学生の保育現場への進路選択を阻んでしまう可能性があることが考えられる。

筆者はかつて保育現場側に身を置き、現在は養成校側の立場である。その立ち位置からみて、保育現場で起こる不適切な保育、とりわけ実習中に学生が不適切な保育場面をみてしまうことや、保育者の実習指導のあり方は、保育現場を志す学生の進路選択を妨げてしまう非常に憂慮すべき事柄であり、保育の人材確保を阻むものとして保育現場や養成校それぞれが対処していかなければならない課題ではないかと考えている。

本論文では、大野 (2018)、全国保育士養成協議会 (2019) が指摘した、実習中に学生が不適切な保育場面に遭遇してしまうことや、保育者の実習指導のあり方が学生の保育現場への進路選択を阻む可能性があることについて、学生へのアンケート調査や筆者がかかわった事例を通し、その実態を明らかにし、保育現場や養成校の課題について述べていきたい。

### 不適切な保育に関する学生へのアンケート調査から

**対象** 筆者が授業を担当する保育士養成校の2年生のクラスに在籍する学生29名を調査対象とした。アンケート調査は学生が保育士資格や幼稚園教諭免許に関するすべての実習を終了した段階で実施した。

**内容** 学生が2年間に経験した保育実習や教育実習を振り返る中で、学生自身が子どもたちに対して不適切な対応であったと思った場面の有無とその場面や内容について、また、実習先の保育士が不適切な対応であったと思った場面の有無とその場面や内容について記述回答してもらった。併せて、実習中に学生が子どもたちに対してイライラしたり、怒りがわいてきたりした経験の有無とその場面や内容についても記述回答してもらった。

**時期** 2020年1月の授業の中で不適切な保育をテーマに取り上げ、その中で上述の内容の質問紙調査を行った。

**倫理的配慮** 倫理的配慮として、学生にアンケート調査の目的・内容を説明し承諾を得た。また無記名回答として個人名が特定されないようにプライバシーに配慮した。得られた回答については授業で使用すること、そして、不適切な保育についての研究に使用することを説明し、それ以外の目的で使用しないこと、また学生にとって不利な状況にならないことも説明した。

**結果** 実習中に保育士の不適切な対応があったと思うと回答した学生は29名中20名で、68.9%の学生が保育士の不適切な対応を実習中に感じていることがわかった。その場面や内容の回答については、複数場面記述した学生もいたため、そのこともわかるよう回答した学生にコードを附し表に示した。

不適切な対応の内容については34件あげられており、そのうち、保育者の子どもへのかかわりに関するものは29件（85.3%）、実習先の雰囲気や保育者同士の関係に関するものは5件（14.7%）であった。

### 筆者がかかわった不適切な実習指導や対応の事例

#### 事例1

在籍中、学習への意欲や保育への志が高かった学生が、ある園から内定をもらい、卒業後すぐに園の要請もあり、研修として園に出向くことになった。その研修中に園の指導的立場にある年配の保育士から、学生が子どもたちの前で恫喝されるという出来事があった。その出来事も含め研修中の園の保育者同士の関係や、子どもたちに向き合う園の雰囲気を敏感に察した学生は悩んだ末に内定を断った。

筆者は再度保育への就職を勧めたが、その園と同じような出来事が立て続けに起こると二度と自分は保育者の道へ戻れなくなるのではという不安を筆者に語り、保育とは異なる業種に就職した。それから2年後、ようやく気持ちが整理できたようで保育者として歩み出すことができた。保育への再就職を本人が考え決断するまでこちらもゆっくりと待つ姿勢をとったが、この学生が研修中に

受けた傷は癒えるまでに2年という歳月が必要なほど大きなものだった。

## 事例2

実習中に指導担当の保育士から説教に近いような指導を連日のように受け、ある時は3時間近く話をされた挙句、「あなたは保育士には向いていない」と指摘された。この学生は普段の学習意欲や姿勢、生活態度に何の問題もない学生で、むしろ他の学生の模範となりうる学生である。実習後、学生は「しばらくは何も考えたくない」と語った。「あなたは保育士には向いてない」と告げなければならないような出来事が現場であったならば養成校に連絡が入るはずである。しかし、そのような連絡や報告は受けてはいない。どのような事情であれ、保育士としての適性の評価はまずは養成校に伝えるべきで直接学生に向けることではない。これは明らかに学生の学びに対する権利侵害であり、対人援助職としての倫理に反する行為である。

## 保育の人材確保に向けた課題

アンケート調査や筆者がかかわった事例から、大野（2018）、全国保育士養成協議会（2019）が指摘した、実習中に学生が不適切な保育場面に遭遇してしまうことや、保育者の実習指導のあり方が学生の保育現場への進路選択にとって大きな影響を及ぼすものであることについてその実態を示してきた。

学生へのアンケート調査では、筆者が想像していたよりも多くの学生が実習中に不適切な保育を目にしており、保育現場の質の低下の実態が垣間見える結果となった。また、事例からは、保育者の実習指導のあり方が学生の保育現場への進路選択を阻んでしまうという現実の一端を示せたのではないだろうか。

しかし、本論文ではあくまで不適切な保育や実習指導のあり方の実態を示すだけにすぎず、これらが学生の進路選択にどのように関連しているのかについて分析し、そこから保育の人材確保を阻んでいるものについて指摘していくには、今後さらなる詳細な調査が必要である。

ここでは、実習指導のあり方や、保育現場と養成校の連携という視点から、今後の調査に向けて筆者が考える保育の人材確保に向けた保育現場や養成校の課題について記しておきたい。

保育の人材確保について需要側である保育現場では人材不足と確保が切実な課題になっている一方で、供給側である養成校では学生の学びの意欲や実習への姿勢、生活態度の問題など資質の低下が課題になっている。双方難儀な課題を抱えているが、人材確保に向けて保育現場と養成校が連携し、実習が学生にとって将来、保育現場を志す大切な契機となるように現場での指導や養成校での事前事後教育について様々な工夫が求められていることは確かである。

保育現場の責任者は、人材確保や育成のために、実習中の指導のあり方や初任者の育成について様々な検討や取り組みをしているが、それが現場で実習生の指導にあたっている保育士レベルにまで広がり組織一体としての対応がなされているかという疑問に思ってしまう現場が多い印象を持

表 実習先の保育士の不適切な対応であったと思う場面

| 学生コード | 場 面  | 内 容                                                                  |
|-------|------|----------------------------------------------------------------------|
| 1     | 活動   | 練習に参加しようとしないうちに対しても無視を一時的ではなくずっと続けていた                                |
| 2     | 遊び   | 外遊びが終わった時、別の部屋に腕をつかんで連れて行っていた                                        |
| 3     | 食事   | 口の中に入っているのに、新しいご飯をまた口の中に入れていた                                        |
| 3     | 遊び   | 水道で遊ぶ子どもの手を強く引いていた                                                   |
| 4     | 給食   | 食事のマナーを守らせようとして、子どもの手を軽く叩いていた                                        |
| 5     | 午睡   | トイレで子どもが遊び始めた時、トイレから出そうと無理やり腕を引っばっていた                                |
| 6     | 活動   | 子どもに対してあまり笑顔を見せていない                                                  |
| 7     | 活動   | 子どもたちの前で職員を集めて大きな声で注意をする                                             |
| 7     | 活動   | 落ち着きのない子どもを倉庫に入れて注意する                                                |
| 8     | 活動   | 実習生がいる前で、子どもや保護者の悪口を言っていた                                            |
| 9     | 給食   | 保育士同士がずっと話をしている                                                      |
| 10    | 給食   | 口をあけてくれない利用者にスプーンを無理に口に入れていた                                         |
| 10    | 移動時  | 教室から出ようとしないうちの腕を引っばり連れて行った                                           |
| 11    | 朝の活動 | 「早くしろ」「なんで遅いの」等の言葉かけ                                                 |
| 11    | 喧嘩   | 「お前ら」「うるさい」「何やってんだよ」など強い口調で言う                                        |
| 11    | 給食   | まだ食事が終わっていないからとトイレに行かせない                                             |
| 12    | 活動   | 運動会の練習の時間、ふざけている子どもを突き飛ばす                                            |
| 13    | 活動   | 並ぶのが遅い子どもの手を無理やり引っばる                                                 |
| 14    | 午睡   | なかなか寝つけないうちの子どもにゲンコツをしていた                                            |
| 15    | 活動   | 兄弟に対して「〇〇くんは出来るよ」等と比べることを言う                                          |
| 16    | 自由時間 | 他児とトラブルになるという理由で部屋から出ないように言い聞かせていた                                   |
| 16    | 遊び   | 友達を叩いた子どもに同じようにその子を叩き、「ねえどんな気持ち？」と聞いていた                              |
| 16    | 活動   | 集団から離れた行動をした子どもに対し保育室から出してカギを閉めた。<br>追いかけたらどうせ逃げるからと放置した             |
| 17    | 活動   | ゆっくり歩いていた1歳児に「早く行って」と背中を強く押し転んで頭を打ったのに、その後何も処置をしていなかった               |
| 17    | 午睡   | ずっと寝付けなかった子どもがやっと寝て、保育士が離れて戻ると起きていて、その子に向かって「マジ最悪、わたしの30分を返して」と言ったこと |
| 17    | 活動   | 泣いている1歳児に「泣いている方がおもしろいよね」と他の保育士と話していた                                |
| 17    | 遊び   | 子ども同士のケンカ場面に怒鳴りつけていた                                                 |
| 18    | 自由時間 | 子どもの下半身を足で押して遊んでいた                                                   |
| 18    | 活動   | 泣いている子どもに対して、腕を引っばり教室の外に出していた                                        |
| 19    | 給食   | まだ食べ物が入っているのに食べ物を口に入れていた                                             |
| 19    | 給食   | 手で食べている子どもに対してスプーンで食べるよう強制していた                                       |
| 19    | 活動   | 時間が迫っていたこともあって子どもをせかしていた                                             |
| 19    | 活動   | 注意する際に「こっちを見て」と手を掴み引っばる                                              |
| 20    | 給食   | 全部食べるまで席から立たせない                                                      |

つ。白石 (2017)<sup>4)</sup> は、「実習が保育者としての就職に影響を与える要因に関する考察」で、学生に半構造化面接を実施し分析した結果、「実習を通じて培われる実習生自身の技術・自信」と「実習先で出会う保育者」が就職に影響を与える要因として指摘している。このことは、実習先で出会う保育者の指導いかんで学生の進路が決められる可能性が高いことを示している。

先述の筆者がかかわった2つの事例からわかるように、学生が出会う保育者は、その後の学生の進路選択や人生にとって大きな影響を与えるものであると言える。筆者が実習について日頃感じていることではあるが、現場では、実習を通して学生の潜在能力を引き出していくというよりも、往々にして学生の出来ないところに焦点が当てられそれが評価につながっているため、学生はそうした空気を敏感に感じ取り、「自分はどう評価されているのか」というところに意識が向けられ、その結果、実習に対する拒否感と保育現場に入ることの不安感を募らせてしまうという悪循環が起きているように感じる。そのことが如実に表れるのが実習の評価表で「積極的な質問がありませんでした」と記述されていることが多々見受けられる。しかし、おおかたの学生は何を質問すればいいのかわからないという状況にあることが多く、むしろ、実習生から質問を引き出すようなかわりや指導が必要で、そうした指導は、実習生の緊張や力みを和らげ、自分からの発言や様々な気づきを引き出すことにつながるのではないかと感じることもある。養成校側も助長していることであるが、学生の積極的な動きのみに実習の期待と評価がなされることは、一見積極的に動いているとは見えないが、センシティブさを持って子どもとかかわることに強みを発揮できる学生の保育者としての芽をつぶすことになるのではないかと考える。むろん、保育現場側からしてみれば、慢性的に人材が不足している余裕のない状況の中で、次から次へと来る実習生の対応をしていかなければならず、その対応や指導は日常の保育の安定に配慮しながら実習指導を行うという負担のかかるものであり、一概に保育現場の実習生への対応に非を傾けるわけにはいかないことは承知している。だからこそ、実習が保育を志す学生にとって前向きな進路選択となりうるために、一保育士の出会いに大きく左右されることがないように、組織的な受け入れと指導体制や指導の質を検討していくことが人材確保の観点においても必要だと考えられる。

それと同時に、本アンケートで学生が不適切な対応だと感じる場面や、筆者がかかわった事案から、本来であれば、保育現場と養成校がその情報を共有し、保育現場は日常の保育を見直す機会につなげ、養成校もその体験について学生とともに考えながら、学生が最終的に保育現場を志せるよう導いていくことが必要である。しかし、現実にはそうした連携がなかなか取れていないことも人材確保を阻む要因になっているのではないかと考えられる。そこには、人材を確保したい保育現場と、実習先や就職先を確保したい養成校の強く一致した利害関係がみえてくる。津崎 (2009)<sup>5)</sup> は、日本の社会的養護が職員や行政をはじめとした関連機関の既得権益の構造で成り立っており、そのことが子どもたちの権利を侵害している実態を表した著書の中で実習問題についても同じような構造があるということについてふれている。ある学生が施設実習で職員の不適切な対応を経験した際に、それを相談したり記録に記述しても、実習指導教員や、施設職員から学生の対応の仕方に問題があると叱責された出来事を取り上げ、それが処遇の改善に結びつけてこれなかった実習の実態

があると述べている。そしてこのことは、実習先を確保しようとする学校側と、新規職員採用に結びつけようとする現場側のねらいが利害上一致する構造が見て取れるとし、学校側が学生が感じた処遇の問題点を指摘し、改善を要請することは実質上不可能に近いことであると述べている。

先述した2つの事例にあてはめれば、学生から実習中の状況について聞き取り、学生の抱える気持ちを受けとめていくことはできたものの、学校としての将来的な実習先の確保や就職先の確保を考え、現場にはその事実を正直に伝えることができないまま収束した経緯がある。こうした対応は津崎（2009）も指摘しているように、不適切な保育の温床になると思われ、最終的には子どもの権利侵害につながる。筆者もそれに加担しているということを受けとめていかねばならない。そして、保育現場や養成校の対応いかんにより、学生の保育現場を志す意欲に影響を及ぼしてしまうことは、結果的に保育の人材確保を阻む要因につながると考えられる。保育者養成にかかわる関係者は、この津崎（2009）の指摘を真摯に受けとめ、子どもの権利擁護と学生の学びの保障を軸に、保育現場と養成校が実習指導について様々な工夫や取り組みを共有しながらフラットな関係を構築していくことが保育の人材確保に向けて必要な課題であると考ええる。

## おわりに

不適切な保育について学生とともに考える取り組みを通して、保育の人材確保において、保育現場や養成校の課題がみえてきた。保育現場の実習指導を批判するような論調であると捉えられるかもしれないが、長く保育現場に身をおいた者として自戒の念を込めて述べてきたつもりである。筆者なりにできることから改善を図っていくことが、保育現場や養成校の質の向上、また保育現場を志す学生の増加につながっていくはずだと考える。

最後に学生に書いてもらった実習エピソードを紹介したい<sup>注4)</sup>。子どものふるまいをセンシティブに感じ取り、その場面でこうした文章で表現できる学生が、保育現場に失望することなく保育者の道を選択し、保育者として長く子どもたちに寄り添えるよう私たちに何ができるか、保育現場そして養成校教員としての責任の重さについて考えさせられるエピソードである。

製作活動で色画用紙を使って葉っぱを作る。

まず先生が見本で色画用紙にクレヨンで葉っぱを描く。その葉っぱをはさみで切る。

子どもたちの番になり、クレヨンで葉っぱを描きはさみで切る。

細かい葉っぱ、丸い葉っぱ、小さめの葉っぱ、ギザギザした葉っぱ…いろいろな葉っぱになったが、それを見た先生が「先生の見本とちがう！やり直し！」と言って、子どもの葉っぱをゴミ箱に捨てた。

今から描こうとしていた子どもは私に「描けないから一緒に描こう」と私の手を持って自分の手を握らせる。その時の子どもの震えた手が忘れられない。

## 注 釈

- 注1) 「不適切な保育」について厚生労働省は2020年に実施した「不適切な保育に関する対応について」の全国実態調査の中で「保育所での保育士等による関りについて、保育所保育指針に示す子どもの人権や人格を尊重する観点から改善を要すると判断される行為」と位置づけた。
- 注2) リアリティ・ショックとは、自分の職業に対して向上心を持って望む人が、職場の現実と自らの職業的な理想や価値との間に生じるズレにより、うまくいかない、あるいは成果が得られないと感じた時の反応のことをいう。Everett Cherrington Hughes による「Men and Their Work (1958)」で示された。
- 注3) この調査は令和元年度保育士養成施設卒業予定者5,532名を対象に行われ、回答者は3,648名(回収率65.9%)であった。回答者の中で、保育職への就職が決定しているまたは希望している学生は3,007名(85.9%)で、一般職への決定や希望者は312名(8.9%)であった。一般職を含め、小学校・特別支援校への就職、無回答や就職を希望していない等、保育職に就かない学生は全体の15.7%を占めている。
- 注4) 筆者は実習ごとに学生にその実習で印象に残ったエピソードを学生に書いてもらい、それを冊子にして実習報告会で配布している。エピソードは、実習生と子どもとのかかわり、子ども同士のかかわり、保育者と子どもとのかかわり、実習生と保育者のかかわり、保育者同士のかかわりなど場面を限定せず、その学生が実習で一番印象に残ったエピソードを取り上げるように伝えている。このエピソードを掲載するにあたり学生には論文の主旨等を説明し了解を得て掲載している。

## 引用文献

- 1) 遠峰良美. (2021). 令和2年度子ども子育て支援推進調査研究事業(厚生労働省)「不適切な保育に関する対応について」事業報告書. 株式会社キャンサーキャン.  
(<http://cancerscan.jp/wp-content/uploads/2021/06/f29e3e0d816930e18686ba5d0661bf32.pdf> (2021年8月11日11時53分))
- 2) 大野和男. (2018). 進路決定における保育実習・教育実習の重要性と実習時のリアリティ・ショック. 鎌倉女子大学紀要, 25, 35-48.
- 3) 一般社団法人全国保育士養成協議会(編). (2019). 令和元年度子ども子育て支援推進調査研究事業(厚生労働省)「指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究」, 163-166. 一般社団法人全国保育士養成協議会.  
(<https://hoyokyo.or.jp/R2report.pdf>) (2021年8月16日12時21分)
- 4) 白石雅紀. (2017). 実習が保育者としての就職に影響を与える要因に関する考察：A短大の事例より. 東京未来大学研究紀要, 11, 181-189.
- 5) 津崎哲雄. (2009). この国の子どもたち 要保護児童社会的養護の日本的構築：大人の既得権益と子どもの福祉. 日本加除出版.